

坂口安吾

風博士



藍岩堂



# 風博士



藍岩堂



諸君は、東京市某町某番地なる風博士の邸宅を御存じであろう？ 御存じない。それは大変残念である。そして諸君は偉大なる風博士を御存知であろうか？ ない。。では諸君は遺書だけが発見されて、偉大なる風博士自体はとして紛失したことも御存知ないであろうか？ ない。。では諸君は僕がの嫌疑のために並々ならぬ困難を感じていることも御存じあるまい。しかし警察は知っていたのである。そして其筋の計算に由れば、偉大なる風博士は僕と共謀のうえ遺書をして自殺を装い、かくてかの憎むべき博士の名誉毀損をたくらんだに相違あるまいとんだのである。諸君、これは明らかに誤解である。何となれば偉大なる風博士は自殺したからである。果して自殺した乎？ り、偉大なる風博士は紛失したのである。諸君は軽率に真理を疑っていいのであろうか？ なぜならば、それは諸君の生涯に様々な不運をらすに相違ないからである。真理は信ぜらるべき性質のものであるから、諸君は偉大なる風博士の死を信じなければならぬ。そして諸君は、かの憎むべき蝟博士の――あ、諸君はかの憎むべき蝟博士を御存知であろうか？ 御存じない。、それは大変残念である。では諸君は、まず悲痛なる風博士の遺書を一読しなければなるまい。

諸君は偉大なる同博士の遺書を読んで、どんなに深い感動を催されたであろうか？ そしてどんなにしい怒りを覚えられたであろうか？ 僕にはよくお察しすることが出来るのである。偉大なる風博士はかくて自殺したのである。然り、偉大なる風博士は果して死んだのである。極めて不可解な方法によって、そしてを残さない方法によって、それが行われたために、一部の人はこれを怪しいとんだのである。ああ僕は大変残念である。それ故僕は唯一の目撃者として、偉大なる風博士の臨終をつぶさに述べたいと思うのである。

偉大なる博士は甚だて者であったのである。たとえば今、部屋の西南端に当る長椅子に腰懸けて一冊の書に読み耽っていると仮定するのである。次の瞬間に、偉大なる博士は東北端の脇掛椅子に埋もれて、実にあわただしく頁をくっているのである。又偉大なる博士は水を呑む場合に、突如コップを呑み込んでいたのである。諸君はその時、実にあわただしい後悔と一緒に似た沈黙がこの書齋に閉じ籠もるのを認められるに相違ない。って、このあわただしい風潮は、この部屋にある全ての物質を感化せしめずにおこなったのである。たとえば、時計はいそがしく十三時を打ち、礼節正しい来客がもじもじして腰を下そうとしない時に椅子は劇しい痼癢を鳴らし、物体の描く陰影は突如太陽に向って走り出すのである。全てこれらの狼狽は極めて直線的な突風を描いて交錯する為、部屋の中には何本もの飛ぶ矢に似た真空がを散らして騒いでいる習慣であった。時には部屋の中央に一陣の竜巻が彼自身も亦周章てふためいて湧き起ることもあったのである。その刹那偉大なる博士はこの竜巻に巻きこまれて、拳を振りながら忙しく宙返りを打つのであった。

さて、事件の起った日は、丁度偉大なる博士の結婚式に相当していた。花嫁は当年十七歳の大変美しい少女であった。偉大なる博士が彼の女に目をつけたのは偉大なる見識といわねばならない。何となればこの少女は、街頭に立って花を売りながら、三日というものの一本の花も売れなかったにかかわらず、主として雲を眺め、時たまネオンサインを眺めたにすぎぬほど悲劇に対して無邪気であった。偉大なる博士ならびに偉大なる博士等の描く旋風に対照して、これ程ふさわしい少女は稀にしか見当らないのである。僕はこの幸福な結婚式を祝福して牧師の役をつとめ、同時に食卓給仕人となる約束であった。僕は僕の書齋に祭壇をつくり花嫁と向き合せて端坐して偉大なる博士の来場を待ち構えていたのである。そのうちに夜が明け放れたのである。流石に花嫁は驚くような軽率ではなかったけれど、僕は内心穏かではなかったのである。もしも偉大なる博士は間違えての人に結婚を申し込んでいるのかも知れない。そしてその時どんな恥をかいて、地球一面にあわただしい旋風を巻き起すかも知れないのである。僕は花嫁に理由を述べ、自動車をいそがせて恩師の書齋へ駆けつけた。そして僕は深く安心したのである。その時偉大なる博士は西南端の長椅子に埋もれて飽くことなく一書をり読んでいた。そして、今、東北端の脇掛椅子から移転したばかりに相違ない証拠には、一陣の突風が東北から西南にかけて目に沁み渡る多くの矢を描きながら走っていたのである。

「先生約束の時間がすぎました」

僕はなるべく偉大なる博士を脅かさないように、特に静粛なポーズをとって口上を述べたのであるが、結果に於てそれは偉大なる博士を脅かすに充分であった。なぜなら偉大なる博士は色は褪せていたけれど燕尾服を身にまとい、そのうえ膝頭にはシルクハットを載せて、大変立派なチューリップを胸のボタンにはさんでいたからである。つまり偉大なる博士は深く結婚式を期待し、同時に深く結婚式を失念したに相違ない色々の条件を明示していた。

「POPOPO！」

偉大なる博士はシルクハットを被り直したのである。そして数秒の間疑わしげに僕の顔をめていたが、やがて失念していたものをありありと思い出した深い感動が表れたのであった。

「T A T A T A T A T A H !」

にその瞬間、僕は鋭い叫び声をきいたのみで、偉大なる博士の姿は蹴飛ばされた扉の向う側に見失っていた。僕はびっくりして追跡したのである。そして奇蹟の起ったのは即ち丁度この瞬間であった。偉大なる博士の姿は突然消え失せたのである。

諸君、開いた形跡のない戸口から、人間は絶対に出入しがたいものである。って偉大なる博士は外へ出なかったに相違ないのである。そして偉大なる博士は邸宅の内部にも居なかったのである。僕は階段の途中に凝縮して、まだ響き残っているその慌しいを耳にしながら、ただ一陣の突風が階段の下に舞い狂うのを見たのみであった。

諸君、偉大なる博士は風となったのである。果して風となったか？ 然り、風となったのである。何となればその姿が消え失せたではないか。姿見えざるは之即ち風である乎？ 然り、之即ち風である。何となれば姿が見えないではない乎。これ風以外の何物でもあり得ない。風である。然り風である風である風である。諸氏は尚、この明白なる事実を疑るのであるか。それは大変残念である。それでは僕は、さらに動かすべからざる科学的根拠を付け加えよう。この日、かの憎むべき蝸博士は、もこの同じ瞬間に於て、インフルエンザに犯されたのである。



風博士

平成二十三年二月十五日 初版

著者

坂口 安吾

発行所

藍岩堂